

雲南病院だより

医療安全への取り組み

医療安全の歴史

日本では、平成11年ごろに重大な医療事故が発生したことを契機に医療安全についての社会的関心が高まりました。これにより、平成11年は「医療安全元年」と形容される重要な年です。その後、社会的にも医療事故防止や医療安全対策の要請が高まり、具体的な医療安全推進の方向性も示され、安全対策を考慮した医薬品や医療機器が普及しました。

当院では平成23年に、医療安全管理者研修を終えた看護師を中心に医療安全管理委員会を立ち上げ、取り組んできました。

さらに、令和元年7月から医療安全管理のため、医療安全室を新設し、医療安全推進室と感染防止対策室に分かれ

て活動をしています。

医療安全管理組織体制

医療安全推進室は、医療安全管理体制の確保・推進や医療事故防止、医療の質と安全管理の向上を担い、室長（統轄副院長）、専従の医療安全管理者および各部署から選出された職員で構成しています。

院内において医療従事者の個人レベルでの事故防止対策と医療施設全体の組織的な事故防止対策の2つの対策を推進することによって、医療事故の発生を未然に防ぎ、患者さんが安心して安全な医療を受けられる環境を整えることを目標としています。

また、当院全職員が医療現場で起こったヒヤリ・ハットした出来事等を速やかに報告

し、それを収集・分析・対策を図ることで安全管理の徹底、情報共有、医療事故発生防止に努めています。

医療安全推進室では、以下の業務に取り組んでいます。

1. 医療安全カンファレンス（会議・協議）週1回
2. 医療安全管理委員会 月1回
3. 院内巡回 月1回
（職場環境が整理整頓されているかの確認、もしくは療養環境の整備のため転倒転落の原因となる箇所の確認）
4. 医療安全管理のための職員教育および研修
5. 医療事故発生時の対応
6. 総合相談窓口との連携

今後の取り組み

患者さんの安全確保と質の高い医療を提供するため、医療安全文化の醸成に努めることが不可欠です。

患者さんが安心して医療を受けられる環境を整え、良質な医療を提供するために医療安全の基本、ルールの遵守と人為的な失敗の発生をできる限り抑えていきます。そのため、院内で課題を共有し、課

題を改善し、常に病院のルールや手順を確認しながら業務を進めていきます。今後も「安全は一人ひとりの自覚から」という意識をより重視し、医療安全への取り組みを推進していきます。

また、医療安全のために私たち医療者だけでなく安全・安心な医療のためには、患者さん・ご家族の皆さんのご協力が欠かせません。ご理解とご協力をお願いします。



職員への指導

カンファレンスの様子



医療安全推進室のメンバー

病院で働く医療のプロフェッショナル

病院では、治療を行う医師や看護師をはじめ、さまざまな職種のスタッフが働いています。その多くは専門性の高いスキルや知識が必要で、国が認める国家資格を有していなければ就けない職種がほとんどです。日進月歩の現代医療に携わる仕事であるために、常に専門知識を磨く努力をする必要があります。また、一人の患者さんに複数の医療スタッフが連携して、治療やケアを行う「チーム医療」にも取り組んでいます。

言語聴覚士の仕事について

Interview

～言語聴覚士・大谷 華（3年目）～



FILE:12

言語聴覚士という職業を選んだきっかけは？

親が医療関係で働いている影響からか、医療の仕事には昔から興味・関心がありました。大学生時代には他分野を学んでいましたが、母の勧めもあり地元の専門学校オープンキャンパスへ参加しました。食べ物の飲み込みにくさや言葉の出にくさを抱える方を支える仕事について聞けば聞くほど、人が生きていく上で大切な仕事だと実感し、言語聴覚士を志しました。

市立病院で働こうと思った理由は？

県外の大学へ進学しましたが、県内での就職を考えていました。そのとき思い出したのが、高校生だったときに参加した当院の職業体験や病院祭のことです。病院スタッフの明るい雰囲気や地域の方の楽しそうな顔を鮮明に覚えていて、同じ職場で自分も働いて、地域の方に医療を提供し、笑顔のお手伝いのできたらと思志望しました。

どんな仕事をしていますか？

年齢や疾患により、理解する・伝える等のコミュニケーションや計算、記憶すること、食べることが難しくなった方の評価や支援を行っています。問題点をしっかりと評価し、リハビリテーションのプログラムを立案して訓練を行います。急性期から回復期、生活維持期に至る広い範囲で関わり、在宅や社会復帰等の目標に向けて医療を提供しています。

市立病院で働いてみての感想は？

当院は急性期から回復期、生活維持期と病態が移りゆくステージに対応した病棟を備えています。各ステージにより評価の選択、病態の変化など異なるため、臨機応変な対応が求められ大変なこともありますが、一人の患者さんと関わり続けることができ、総合病院ならではのやりがいを感じています。

将来どのような言語聴覚士になりたいと思っていますか？

最新の知識や技術を深め高めることはもちろんですが、それを活かして、さらに患者さん一人ひとりに合ったリハビリテーションを提供できるようになりたいです。

言語聴覚士の仕事のやりがいを教えてください。

一時は食事を摂ることや話すことが難しくなった方が、リハビリテーションを行うことで少しずつ改善していき、患者さん本人だけでなく、ご家族にも笑顔が増える様子を見ると嬉しく思います。自分に対してふがいないと悩むこともありますが、笑顔や感謝のお言葉をいただいたとき、やりがいを感じます。

言語聴覚士をめざす学生に向けてひとことメッセージを！

言語聴覚士は食べることや聞き話すことなど、人が生きる上で大切なことを支える仕事です。問題点を見極めるための知識や技術も必要ですが、できていたことが難しくなった患者さん、ご家族の心を受け止める力も必要だと思います。自分の考えを伝える力、他人の話を傾聴する力を培われると良いと思います。



▲口の体操

▲食事介助の様子



今回の3人の看護師、助産師が取り組みを発表しました。参加者からは、「よくある症例が関わり方で大きく変わることを学んだ。退院を見据えた関わり的重要性も学べた」、「退院を見据えた看護は、

看護学校卒業後3年目から5年目までの看護師を対象に、これまでの自分の看護を振り返り、また今後に活かしていくために、ケーススタディに取り組み、発表会を開催しました。この取り組みは、ケーススタディを発表することで自己成長につながることや、日々の看護実践の中で常に問題意識を持つ能力を養うことを目的としています。

ケーススタディ発表会

自分も現在目標としているところで意識して関わらないといけない」と感想を述べていました。

今後も新人看護師の教育を継続的に行っていきます。

- ※1 ケーススタディ：事例研究
- ※2 ADL：食事・更衣・移動・排泄・入浴等の生活を営む上で不可欠な基本的行動。
- ※3 エモーショナルサポート：日常生活の心理的支援

発表者

- 沢津 翔太 (3階西病棟看護科・看護師)**
一般病棟での早期離床に対する関わりと効果
- 松浦 愛 (2階病棟看護科・看護師)**
認知症を伴う脊椎圧迫骨折で入院している患者の在宅復帰をめざしての関わり
—「できるADL^{※2}」と「しているADL」の差を近づける—
- 萬代麻美子 (2階病棟看護科・助産師)**
入院中の産褥期の女性A氏への指導内容振り返り
～産褥期の心理的变化の理解とエモーショナルサポート^{※3}の活用～

病院紹介

言語聴覚士

地域医療 日本一をめざし 頑張ります！

言語聴覚療法は、理学療法・作業療法と並びリハビリテーションの一つです。言語聴覚士は国家資格となつて約20年と理学療法士・作業療法士に比べまだ歴史が浅く、有資格者も少ないのが現状です。

当院では言語聴覚士は3人在籍しており、入院患者さんだけでなく、ご自宅へ伺って行う訪問リハビリテーションも提供しています。

言語聴覚士が主に支援するものとしては、脳の病気によって聴く・話す・読む・書くといった言葉の機能が障害される『失語症』、唇や舌の麻痺により呂律が回りにくくなる『構音障害』、注意力や認知機能の低下といった目に見えない症状である『高次脳機能障害』、そして病気や加齢等によって嚥下^{えんげ}飲み込み^{のみ}する機能が衰える『摂食・嚥下障害』などが挙げられます。

言語聴覚士は、このような問題の対処法を見出すために検査・評価を実施し、必要に応じて訓練・指導・助言・その他の支援を行います

特に高齢化が進むこの地域では「摂食・嚥下障害」によって誤嚥性肺炎を起こして入院される方を多く見かけます。「摂食・嚥下障害」と一言にいても、認知機能の低下により食物を認識できなくなったり、しっかりと覚醒できずに食事の途中で眠ってしまったり、歯の欠損によって十分に咀嚼できなくなったり、飲み込みの力が弱くなって誤嚥したりと、原因や症状はさまざまです。そういった方に対して言語聴覚士による評価・環境調整だけでなく、必要に応じて耳鼻咽喉科医と連携して飲み込みの検査を行います。それにより、食事形態・姿勢・一口量等、その方が安全に食

べられる方法を見つけ出します。そして、口の動きや飲み込みの力をつけるトレーニングも同時に行っていくことで食べる機能を向上させ、徐々に適切な食事に近づけていきます。また、退院後も安全に食事を摂っていただけるよう、ご家族や施設のスタッフの方々へ食事の注意点をお伝えすることも我々の仕事です。

食べる機能が衰えると栄養が十分に摂れなくなり、それによりさらに食べる力が衰え、ひいては体全体の機能も衰えてしまい、けがや病気になりやすくなります。こういった状態にならないよう、地域住民の方々に予防方法をお伝えしていくことも今後積極的に行っていきたいと考えています。

コミュニケーションや食事等、人間が生きていく上で必要不可欠なものを支援することは非常に難しい部分もありますが、これからも地域の皆さんのお役に立てるよう精一杯頑張ります。



講座の様子

市民健康講座 家族を守り隊！

〜ここで学んであなたも、おうちナース〜になろう！

1月30日(木)、今年度第2回目となる市民健康講座を開催しました。

この講座は、病院の専門スタッフが地域の皆さんに健康に関する情報を提供し今後の生活に役立てていただくために開催しています。

今回は「口は災いのもと!?」というテーマで開催しました。講師は、島根大学医学部歯



菅野 浩平 歯科医師 松田 浩平 歯科衛生士 小池 浩平 歯科医師

口腔外科の小池尚史^{こいけのしかし}歯科医師でした。当院では昨年9月から週1回、歯科口腔外科外来を開設しており、その取り組みも併せて紹介しました。口には、「食べる」、「話す」等、重要な働きがあり、歯や口の中の健康を守ることが元気に生活する上で大切です。しかし、口の中にもがんがでることがあり、それを総称して「口腔がん」といいます。

講演の後に質問の時間を設けましたが、次々と手が挙がり、参加された方の関心の高さがうかがえました。アンケートには、「定期的に歯医者に行こうと思います」、「健康維持を続けようと思いましたが、すぐに実践に結びつけられるといった感想をいただき、好評でした。今後皆さんの役に立つ講座を計画したいと思っております。どなたでも気軽に参加ください。



▲言葉の訓練



▲飲み込みの検査



言語聴覚士スタッフ